医甲様式２

論文審査の要旨（甲）

申請者領域・分野　氏名	総合医療・健康科学領域　社会医療総合医学教育研究分野 田中　里奈
指導教授氏名	中路　重之
論文審査担当者	主査　田坂　定智 副査　佐藤　温　　副査　黒瀬　顕

（論文題目）Influence of distance from home to hospital on survival among patients with lung cancer
（肺がん患者における自宅から医療機関までの距離が生存率に与える影響）

（論文審査の要旨）

青森県のがん年齢調整死亡率は 47 都道府県で最も高く、中でも肺がんは罹患率が 3 位、死亡率が 1 位である。申請者は医療機関へのアクセスが患者の治療内容や生存率に影響している可能性を考え、県内の肺がん患者の自宅から医療機関まで距離と治療内容や予後との関係について検討を行った。

青森県がん登録標準データベースを用いて、2009 年から 2011 年に罹患した肺がん患者 3,986 名の性別、生年月日、診断日、診断時住所、診断時病期、発見経緯、治療内容、死亡日、初診医療機関名を抽出した。呼吸器内科を標榜する公的病院を専門病院とし、それ以外を一般医療機関とした。診断時病期は限局、領域、遠隔、不明に分類し、自宅から医療機関までの距離は球面三角法で直線距離を算出した。結果として、専門病院では 65 歳未満の患者が多く、診断時病期は限局が多かった。75 歳以上の患者は一般医療機関で多く、病期が限局である割合が少なかった。観血的治療を受ける患者の割合は専門病院で高く、一般医療機関では病期が限局であっても観血的治療を受けた患者の割合は少なかった。専門病院では、病期が領域の患者のうち、自宅からの距離が 20km 以上の患者の方が 20km 圏内の患者よりも生存率が高かった。これに対し、一般医療機関では自宅が 20km 圏内の患者は病期が限局であっても生存率が低かった。結論として、青森県においては肺がん患者の自宅と医療機関との距離は生存率に明らかな影響を及ぼさないものの、初診医療機関が専門病院かどうかにより予後が影響を受ける可能性が示唆された。

本研究では、青森県においては肺がん患者の自宅と医療機関との距離は生存率に明らかな影響を及ぼさないものの、初診医療機関が専門病院かどうかにより予後が影響を受けることが示唆された。病期が限局の患者であっても、手術可能な医療機関との連携が不十分などの理由で適切な治療を受けていない可能性も考えられた。この結果は、地域における医療機関へのアクセスや専門病院の整備ががん患者の予後に与える影響に関する重要な知見であり、学位授与に値する。

公表雑誌等名	Asian Pacific Journal of Cancer Prevention （掲載予定）